CURUSADERS

隣の番長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＵＲＵＳＡＤＥＲＳ

【Ｎコード】
Ｎ５００３Ｚ

【作者名】
隣の番長

【あらすじ】
人々は、闇を誘い、闇に願い、闇に怯える。
この世界には、悪魔が人の魂を喰らい、社会という醜悪な闇に影を落とす。
全世紀、悪魔と契約することで、願いを叶える。そう甘い誘惑で衰弱した人の心に漬け込み、代償を奪い取っていた。

そんな世の中から時は過ぎ、１９８２年。

その時、すでに悪魔は人の世に興味を持つようになっていた。
そして、代償として魂を喰らい、体を奪い取り、人の世で効率的に行動できる足を手に入れていた。
それを元に、人の世に顕現し、人の魂を乱獲するようになっていた。

その年、対悪魔祓いとして組織された集団が一気に拡張し、防戦一方だった世界は反旗を翻した。

悪魔と人間との直接対決、戦争へと勃発した。

「／／／／戦争」
戦いは、悪魔の王を打ち取ることで終戦。人間の勝利という形で終結した。

それから５２年の月日が流れた。現代。
２０２４年。

戦争が終結した世界で、尚も悪魔に願いを託す人間が後を立たず、今も悪魔が世の中を徘徊している。

高校生、柳沢篠は、悪魔との遭遇により彼女の世界は常識から外れ、闇の世界に足を踏み入れた。

そして、鎌のような刀をもった黒髪の少年、来生牙鳥と、悪魔に対抗する組織の中のひとつ「ＳａｃｒｅｄＣｒｏｗｓ」に出会った。

彼女の世界が闇に変わるか、光に進むかの選択が交差する。

不器用な少年と人に怯える少女の物語が始まる。

運命が微笑むか、命運があざ笑うか・・・・・・

黒い鳥にいざなわれて彼女の未来は――――

プロローグ（前書き）

この小説は自己満足です。過度な期待はしないでください。
アドバイス歓迎。中傷はお控えください。

プロローグ

――――闇夜(やみよ)に月明かりがうっすらと地上を照らす。

「はぁっ、はぁっ」

夜のビル街に響く荒い息つかい。
一人の女性が涙を浮かべながら必死にビルの真横、非常階段をカツカツとヒールが鉄を打つ音を鳴らして駆け上がっている。

「ちょっとぉ、冗談じゃないわ。まさか、あんな奴が現れるなんてっ」

下を振り向きながらその階段を上る。

夜の闇の中、階段の下から聞こえるもうひとつの足音。暗闇(くらやみ)の中、その足音の主の姿を確認することすらままならない。

しかし、女性は、その存在を理解しているのか、ただ、恐怖という感情に押されるがままにその足を動かす。

彼女はやっとの思いで屋上へと到達した。

彼女はその足で後ろを振り向きながら、姿を見せない存在に怯えながら奥へと、恐怖でふらふらになりながら不規則に息を切らす。

「え・・・こ、こない？」

動揺しながらも安堵のため息をついた。

「・・・キャハ」

その笑い声に女性は勢いよく振りかえった。

そこにいたのは、着崩れたスーツを着た中年の男。

瞳は赤く染まり、血の気も感じないような真っ青な肌。開いた口からは唾液が滴(したた)り落ちている。両腕は力が入っていないようにぶらぶらと揺れている。

「いやぁ・・・こないでよ・・・・・・」

女性はゆっくりと後ずさりをして、視線をそらすこともできず、段差につまずき転倒した。

「こないで・・・冗談じゃないわよ!!」

女性は転んだ時につまずく原因となった折れたヒールを拾い、男に投げつけた。

しかし、男は折れたヒールが顔に当たったことすら気づいていないのか、見向きもせず、ただ、ただただ、不気味な笑みを浮かべ、その笑い声を響かせる。

「もう、こんな臭いだけの体イヤなの。その体と交換して・・・？」

中年の男が発する女の声。意味不明な言葉を投げつけ、首を肩を

超えるところまで傾けた。
「い、いやよ！！こないでよ・・・・・・”悪魔”ぁ・・・・・・」
「キヒッ・・・・・・キヒャ・・・・・・ヒャ・・・・・キヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒ――――ッ」
不気味な笑い声。男の両手が指を大きく開いて女性の首元に手をかけた。
「もらうね・・・その綺麗なカ・ラ・ダ・・・キヒィ」
「いやぁああああああああ！！！」
女性の悲痛な叫び声。それと同時。視界が真っ黒に染まった。
「――――断斬符」
「キギャァアアアアアアアアアアアア」
別の若いであろう男の声が耳に入り、物々しい耳に残りそうな叫び声が響き、女性を取り込んだ黒い煙は空気に溶けるように消えた。
もどった視界で女性が見たもの、それは、自分を捉えた男の両腕が本体である身体から離れ、宙に飛び、赤い血に紛れて２枚の札が通過した。
「闇祓いて、聖なる加護を――――」

女性の周囲に４枚の札が地面に張り付き、ガラスのような透き通った四角形の箱、壁を生成した。

カツカツと１５，６の年齢であろう身なりの茶髪の少年が制服姿で箱の中へ。

「もう大丈夫ですよ。ここは結界の中です。あなたの安全は保障しますよ」

少年は優しく微笑んだ。

「あ、あんたは・・・・・・？」

女性の震える声に少年は、あー、と回答を保留し、

「答えるのは後。もう少し待ってて、すぐに終わるから・・・・・・」

と言って箱、もとい結界の外へと壁をすり抜けた。

「さぁ、”悪魔”さん観念してもらおうか・・・？」

両腕の切断部から血を流し、唸り声をあげている女声の男・・・”悪魔”に告げて、ポケットから数枚の札を取り出してトランプのように広げた。

「お前ら・・・”クルセイダー”か・・・・・・」

「ご名答―」

少年は口笛を吹いて余裕を見せつける。

「なぜ場所がわかった！！」

少年の手元で札が浮き上がり少年の体の周りにそれぞれ駐留する。

準備完了と言ったところだろうか。

「うちには優秀なナビが２人もいるものでね・・・・・・」

＊

「くしゅん！」

別の場所、暗い一室でパソコンの画面があやしく光る。

そして、パソコンの前で背丈の小さな少女がくしゃみをした。

「なになに？誰かウチの噂でもしてるのかなぁ・・・もぉ」

そう言ってキーボードを素早くたたき始めた。

＊

「くっ――――」

悪魔が、歯を食いしばり、いかにも悪魔らしいであろう、黒い翼

を背中からスーツの布を破り勢いよく広げた。

「逃がすかよ――――！！」

少年が右手を前に出す動作と同時に、宙に浮いていた札が６枚悪魔目がけて飛ぶ。

だが、勢いよく悪魔が翼をはばたかせ空へと浮き上がり、札は後ろにあった鉄格子、貯水タンクからの配給用パイプに突き刺さり、鉄格子をすり抜け。と目標はずした。

「命あってのって感じね、別の体を探すわ！！」

悪魔は翼をはばたかせて背を向け、ビルから遠ざかっていく。

「待て！！」

少年の周囲に浮いていたすべての札を空を飛ぶ悪魔目掛けて放つ。

「っ！？・・・ぐぅ・・・・・・」

１枚の札が悪魔の左の膝から下を切り落とした。

動きが鈍り、飛行が不安定になり、徐々に降下し始めた時。

少年が一枚の札を右手の二本指で挟み横に空を斬ると紫色に怪しく光った。そして、受話器のように耳に当てた。

「カラス！！」

＊

更に高く、札を使う少年が立っているビルから４つ離れたビルのヘリポート。

ライトアップされたヘリポートのＨという文字の中心に一人の少年。腰まで伸びた黒い長髪。そして、腰の後ろには刃がむき出しの刀。まっすぐなら１．５ｍはあるであろう刀身は、剣先３分の１のところで直角に曲がり、まるで鎌のようだ。

『行ったぞ！！』

「へっ、逃がしたのかよ・・・ざまぁ」

札を使う少年と同じく、”カラス”と呼ばれた少年は紫色に怪しく光る札を耳に当てて言った。無線機の役割を果たしているようだ。

『うるさい！そんなこと言ってる場合か！！』

「だぁー、もう耳元で騒ぐなよ・・・・・・」

札を使う少年のそのあとの言動を聞くことなく、札を頭上で手放し、風に乗り夜の空に消えた。

「さぁ、狩りの時間だ――――」

黒い長髪の少年は、ライトが当たるところからゆっくりと歩いて、端へと移動する。

「――３」

ヘリポートのぎりぎりに立って、ゆっくりとその体を傾ける。

「――２」

斜め４５度の礼を超えたところで少年の肉眼に、ヘナヘナになって飛ぶ悪魔の姿を捕捉した。

「――１」

目を大きく開くと、血走った瞳で口元を開いて笑みをこぼした。すでに８０度オーバー。

「――０」

９０度。

少年の体は落下するかと思われた。だが、オフィスの壁、強化ガラスに足をついて重力に逆らうことなく走り、加速する。

「さぁさぁさぁさぁ――――！！！」

少年はガラスを蹴って飛びあがった。完全に何もない、周囲は空気。考えられない行動。脅威のジャンプ力。軽々と２０ｍは飛んだであろう。・・・そして、

「オネンネの時間だぜ、あーくーまーちゃーん・・・・・・？」

少年は悪魔の背中に着地した。悪魔はバランスを崩して高度ががくっと下がり、一瞬立て直すも落下していく。

地上３０ｍ。

「なんで空から！？」

「なんでって、俺が空飛ぶ悪魔狩りの悪魔さんだからだよ」

そうビルから落下とは言わず、無表情で腰の鎌のような刀を抜いた。

「お前もクルセイダーかぁあああああああ！！」

落下の中、少年の鎌のような刀の剣先が悪魔の喉にかけられた。

「ぐっどないと・・・・・・」

不自然な英語を残し、

「くそぉおおおおお・・・ぉ・・・・・・」

刀を引いた。

すると、刃は首をすり抜けた。そして悪魔は意識を失った。少年が忍者のごとく事務所などがある合同のビルに飛び移った。悪魔の体は車が数台信号停止している車道に落下。車から人が降りてきて大きな悲鳴と奇声が響いた。

「成仏しろよ・・・・・・」

微塵も思ってないであろうセリフを怪しい笑みを浮かべて言った――――

＊

「・・・ったく、あのバカラス！！」

札を武器に変える少年が長髪の少年が悪魔を撃墜したのを見て憤りで怒鳴るように言った。

「やったの・・・？」

「ああ・・・・・・ええ、もう大丈夫ですよ――――解（カイ）」

声を震わせながら問う。結界の中で恐怖に震えている女性に少年が冷静になって肯定し、指を鳴らすと結界が消え、結界を作っていた札が消滅した。

「――――終わったようですね」

「あ、マスター」

女性に近寄ろうとした足を止め、少年の向いた方からくる声の主に気付き、マスターと呼んだ。

「今度は誰よぉ・・・」

少年の緊張感のない声と現状の打破に気持ちが緩んだのか、泣き

そうな顔で女性は背後を振り返った。

そこにはニコニコと笑顔を振りまくような、長身の青年がネクタイを締め直しながら近づいてくる。

「こんばんは、無事ですか？お怪我は？」

「え、はい・・・・・・」

ニコニコしながらの問いに戸惑いつつ頷いた。

「まぁ、あなたの逃走経路で何人か殺されてましたが・・・・・・。あ、あなたにも後ほどいくつかの事情とサインをしていただくことになり・・・」

「あの」

「・・・ます。はい、なんでしょう？」

話に割り込まれても顔色変えずにその表情を青年は崩さない。

「何者なんですか彼ら。”悪魔”を倒すことができるなんて・・・・・」

青年は、見上げる女性の目線に腰を落とした。

「・・・我々は民間の方々を守るために”悪魔”討伐をする民間会社、”Ｓａｃｒｅｄ　Ｃｒｏｗｓ”の者です」

女性の心情を察することなく自己紹介をした。

「じゃあ、”悪魔”討伐の専門家って・・・・・・？」

「ええ、少し特殊な訓練を積んだ人たちが集まる、悪魔退治のプロフェッショナル。世界各地にある”教会”に統括された”闇を殺せる武器（デモンズシックル）”。そしてこの子達が我が社の”十字架を背負う者（クルセイダー）”、悪魔を討つ”剣（ツルギ）”です――――」

見えない力、冷たい風が肌に吹き付ける。そして、車道から人の騒ぎ声と車のクラクションが夜の街に鳴り響いた。

プロローグ（後書き）

連載内容ぁまとまっているので、ちょく?と進めていきたいなと思います（＊、∀、＊）

第一章　悪魔が学校にいます（前書き）

物語が始まります。

第一章　悪魔が学校にいます

季節は6月。まだ涼しいだろうと思いきや、日中はサンサンと照らしつける太陽のおかげでじんわり汗ばむ。季節が移り行くのを感じる。

「あーちぃー・・・・・・」

駅の入り口の段差に座りこむ制服姿の少年。腰まで伸びた黒い長髪。ワイシャツのネクタイを緩め、だらしなく出したシャツを指でつまんで内側を扇ぐ。

駅から出てきた人々が座りこむ少年をチラリと見ては何食わぬ顔で去って行く。

「・・・・・・あ？」

ふと、少年の目と鼻の先にあるタクシー乗り場に一台の白いスポーツカーが停車した。助手席の窓がゆっくり開くと、小さな少女が首元で押さえつけるシートベルトを握りながら顔を出した。

「ごっめーん、おまたせガーくん」

「おっせぇ！！」

罵声を飛ばすと同時に勢いよく立ち上がり、スタスタと車に寄って行く。

助手席の窓を覗くと、落ち着きのある男の声。

「すみません、少し用事が長引いてしまって」

えへへ、と楽しげに少年を見上げる少女の先、運転席に座っていたのが声の主。ニコニコと笑顔を振りまき、謝罪と理由を少年に告げた。

「いいから乗りなよ、う・し・ろ」

少女が窓から顔を出しながら、後部座席の窓を外から指でつついた。

少年は舌打ちをすると、気に入らない様子で後部座席に乗り込んだ。

乗り込んだことをミラーで確認すると青年は車を出した。少年は、走り出すと窓に頬杖をついた。
「そんな不機嫌な顔しないでくださいよ、本当に反省しているんですよ？許してくださいよ」
「そーだよそーだよ、たった1分の遅刻くらい水に流す寛大さがないと社会の荒波にもみくちゃにされちゃうよ？」
後部座席を振り向いて言った。
「1分じゃねぇ、1時間だ」
「あれ、そーだっけ？」
首をかしげた少女に深く頷く。
「にゃはは、細かいことは気にしない気にしないっ」
親指を上に立ててほほ笑んだ。
「おい、折居（オリイ）、お前の娘は反省してませんよと主張してるぞ」
「私は本当に反省してますよ、そう怒らないでください、牙鳥（ガウ）」
後部座席で少女を指さして、どや目を細める少年、来生（キスギ）　牙鳥（ガウ）をミラー越しに見て、信号を曲がりながらほほ笑む木戸宮（キドミヤ）　折居（オリイ）。
「チッ、ニコニコしやがってこのペテン師」
二人の笑顔が気に食わないと言った様子で、窓の外に視線を外した。
「あとで何か冷たいものでもおごりますから、なだめてくださいよ。もちろん、いつもの麦茶ではなく、ちゃんとしたお店です」
「パパ、ウチにはー？」
「お前までいらんだろ」
「こらこら、私の可愛い娘をいじめないでください。大丈夫ですよ、もちろん霄（ソラ）も一緒ですから」
牙鳥を余所に「パパ大好き」「私もですよ愛しています」と親、子離れできない二人はえへへ、うふふな愛情を見せつける。
見せつけられた当人は、付き合い切れない、と呆れてふっ、と鼻でため息をついて再び窓の外に視線をはずした。
「それより牙鳥、どうでしたか、評議員の方々は」

その言葉に少年牙鳥の眉がぴくりと動いた。
「別に・・・・・・責任はうちのオーナーになすりつけてくれ。俺は仕事をしたまでだ。なら、お前らはあのまま逃がしてもよかったのか？逃がしても騒いだだろう。やり方？空飛ぶ敵を翼もない“俺”が地面に落としたんだ褒めてもらいたいね」
評議員の方々という人達に、牙鳥が本当に答えた内容を話した。肝心の評議員への感想は「別に」とたった二文字に収まる。
牙鳥の言葉に少女、霄は口をあんぐり開けて、
「さすがガーくんだねー、上層部にそんな態度でゆったんだ。さすが問題“十字架を背負う者（クルセイダー）”」
と呆れるように呟いた。
「私が責任を負うのは、立場上構わないのですが、いくらクルセイダーといっても、神を崇拝する上層部の方々に邪険にされているとは言っても、その盾突く態度はまさに火に油ですよ？」
「寝耳に水みたいな？」
「おしいですが少し違いますね」
「おしくもなんともねーよ親バカ」
ふむ、と霄は首をかしげた。
「でも、俺を認めてくれるやつがいる限り、こんなゴミみてーな世界でも生きていける」
素っ気なかった態度から一変。そう言った牙鳥の目が、鏡を通して折居と目を合わせると、すぐにむすっとした表情でまた外に視線を外した。
「それ名台詞だねー、ウチは好きだよそれー」
「牙鳥の・・・・・・お父さんの言葉でしたよね」
表情には素直にでないが、少し照れてしまっていると察した言葉。
「ああ・・・・・・俺を最初に認めてくれた・・・・・・親父だ――」
そう、寂しげに言って、車内から見える移り行く街並みの風景から、雲一つない、静止した空を見上げた。

＊

季節は6月。気温も、日差しも日に日に強くなって、体の芯まで焦がし、それに応じて汗がじわじわと吹き出す。

ベタベタな体。あたしはそんな夏が嫌い。暑くて、じめじめして息苦しい。自然とイライラしてしまう。

「あーっつーい」

背中を曲げて気だるそうに歩くキャミソールにミニデニム、ヒールの高いサンダルを履いた少女。無数のヘアピンでくせのある髪を無理やり留めて、形を整える力技を行使したくせの多い跳ねた茶髪。一歩一歩、おもむろに重い足取りで商店街から持参のトートバックに買い物の中身を入れて出てきた。

「汗は体の涙だよ・・・・・・」

アーケードの中の蒸し風呂からの解放。と思いきや、特に風もなく涼しくもないためか、あー、と大きなため息が垂れ流される。

強い日差しが、白い肌を焼こうと悪意も、善意もなく照らしつける自然の摂理。

「あー、アイス食べたーい！！」

彼女、柳沢（ヤナギサワ）　篠（シノ）が人目もはばからず大声で夏の空に叫んだ。

住宅地の向かい側にあるコンビニから篠は出てくると、出るや否や買った氷菓子の棒を袋から引出し、口にくわえた。

「こふぇよこふぇ、ふうぇひゃしゃがしゃあんあいあ」

訳すと「これよこれ、冷たさがたまんないわ」と、氷菓子が入っていた袋をコンビニに設置されたゴミ箱に捨て、先の気だるさとは違う、満足そうな顔で横断歩道の信号を待つ。

コンビニの店員に袋要りません、と地球温暖化対策につながる資源節約に協力した気でいるためかいささか、気分よくコンビニを出て、アイスの冷たさで気分は快調。精神の嵐は去り、春が来たようだ。

「ただいまー・・・・・・」

住宅地を抜けると、古い家が並ぶ住宅がある。正方形の敷地に並ぶ住居の真ん中に少し広い庭がある家。それが柳沢篠の家。そして、玄関の引き戸をガラガラと昔ながらの音を響かせ、帰宅した。

「ホント家の中は天国よねー・・・・・・」

と、言いながらまだ灼熱地獄のままの表情で、手で仰ぎながら台所へ。買ってきたものを冷蔵庫にしまうと、ふぅ、とため息。

落ち着いた顔で畳が敷かれた居間へ。入ってすぐにテーブルのリモコンの電源ボタンに指をかけた。

旅番組が流れるが、チャンネルを変えることなく隅にある仏壇の前へ行き、ゆっくり膝をついた。

「ただいまー、外熱かったよー」

仏壇に置かれた写真。優しくほほ笑む着物姿の老婆。手を膝に立てて、前のめりで淡々と嬉しそうに話、話しては笑い、話しては笑う。

———あたしは、祖母を一年前になくした。

突然のことだった。ある日、おばあちゃんが倒れて病院に運ばれた。それは、あたしが中学3年の6月で、今日のような暑さ。学校から帰ったあたしは悲惨な現実を突きつけられた。

下校途中のあたしは、周りが騒がしく、人が倒れたと聞いて、朝の出来事を思い出した。

おばあちゃんは、朝、急にうずくまった。でも、病院には行かないと言って、あたしは学校があるから布団に寝かせ、一人にして出てきてしまったのだ。

元々、この家にはあたしとおばあちゃんの二人暮らし。あたし意外に気づける人なんていなかった。おばあちゃんはただの立ちくらみで、年だからこのくらいはあるよっていつもみたいにほほ笑んだ。

あたしは、急いで家に走った。救急車が止まっていて、近所の住民の人だかりができていた。

その光景を茫然と見ていたあたしに気づいた近所のおばさんが、「おばあさんが倒れたのよ」と告げ、初めて自覚した。

隣のおばあちゃんが、訪ねてきた時に倒れてるのを窓から発見してくれたらしい。

あたしは、意識をなくし、救急隊員が人工呼吸器を口にあてて抑えているのを見ながら一緒に病院へ行った。

意識がもどらないまま数時間。寿命がきたのかもしれない、と担当の医師に告げられた。他にもいろいろ言われたけど、その言葉だけで理解できるし、それ以前に耳に入ってこなかった。たった一人の家族が死ぬかもしれないということを聞いて動揺していた。あたしは、母親も父親もいないのだから。

両親の職業は立派なクルセイダーだったそうだ。悪魔に殺されたどころか、遺体すらも残さず消されたそうだ。それもあたしがまだ1歳の時。もう写真でしか顔もわからない。そして、おばあちゃんは、悪魔が次々と魔界の門から魔獣や、死神を連れて世界に侵攻してきた時代を戦った。”デビル　デトネイション”・・・・・・”闇に喰われる世界”と呼ばれる歴史の中で、押されていた人類が反旗を翻(ヒルガエ)した”人類生還戦争”を戦い抜いたクルセイダーだ。

正直、悪魔もだけど、魔法も憎かった。あたしからこんなにも大事なものを奪って、一人にさせようとする。あたしは一人が怖い――

だから、あたしは、同情を求めていたずるい子で、ずっとおばあちゃんや、他人に甘えて生きてきたんだと思った。それでも、おばあちゃんが好きで、大好きだったから、がんばるからって何度も、何度も願った。怖くて仕方なかった。

でも、そんなあたしの願いが届くことなく、おばあちゃんは2日後に静かに息を引き取った―――

「ダメだ・・・・・・もう1年経つのに」

脱力して背中が丸まる。自分の情けなさを嘆いて大きなため息をついた。

「・・・・・・おばあちゃんにはホント甘えてたんだなって、今ならわかるよ・・・・・・」

ふぅ、と小さなため息をつくと、立ち上がって、両頬をパンッと叩いた。居間の隣にある台所へと行くと、トートバッグからパックに詰められたみたらし団子を取り、再び居間へ。

「おばあちゃんが好きだったお団子っ、おいしそうだから買ってきちゃったっ」

そう暗い気持ちを吹き飛ばそうとするかのように明るく笑みを浮かべた。団子を大胆にもパックのまま仏壇に供えた。

「お団子おいしっ！」

そう満面の笑みで親指をぐっと立てて仏壇の写真に向けてピンと腕を伸ばして突きつけた。

「もう、怖いなんて言ってられない。一人でも強く生きていかなきゃっ」

脇を締め、両の拳を胸元で握った。

第一章　悪魔が学校にいます２（前書き）

２ページ目です。

第一章　悪魔が学校にいます2

＊

翌朝、いつものように学校へ行く支度をし、弁当を作り、朝食を済ませた。

「さて・・・・・・」

台所から居間へ行き、おばあちゃんの仏壇におはよう、と言って線香に火を灯し、手を合わせる。

「それじゃあ行ってくるね、おばあちゃん」

微笑んで立ち上がると、二階の自分部屋へ行き、鏡に写る自分の姿を確認して身なりを整えた。髪をいじり、蝶ネクタイをまっすぐにする。

「よしっ」

そして、朝から意気込みを感じさせる一声。勉強机の上に置かれた鞄を手に玄関へ。

「行ってきますっ」

おばあちゃん・・・・・・今日も快晴です。

衣替えも済んだ今日この頃。

篠は、何気ない顔で携帯電話の画面を眺めながら高校への通学路を一人歩く。街道沿いを歩きながら、大通りを目指す。

あたしが通う高校は、私立綾乃美南海（アヤノミナミ）。元は女子高だったのだが、８年前に女子高から共学に改定された高校だ。

と言っても、まだ男子生徒の数は全学年で４０人ほどしかおらず、男子からすればハーレムであり、女子からすれば少し意識する生活に期待で胸躍ると言ったところ。一部は、女の子だけの方が気が楽かな、って人も中にはいるけど。正直、私はそんなのどっちでもいいかなー、なんて。今までそんな色気づいたこともなく、男子にち

やほやされたこともない。クラスからの評価も中の中、成績も中の上くらいの平凡女子高生なのだ。
「それにしても熱いなぁ」
一度立ち止まり、朝からご苦労様です。と敬いたくなるほど照らしてくる太陽を見上げてつぶやいた。朝だからまだ涼しいけど、これから暑くなる予感・・・・・・。6月になって一気に夏という意識が沸いてきた。この間まで春だ桜だ、花粉症だと騒いでいたのに。
「温暖化万歳・・・・・・」
温暖化をひがみながら、これから暑い一日を過ごすことにやや鬱になりつつ、再び登校中のその足を歩ませ始めた。
携帯の画面を見て少しうれしそうな顔をした。
「うそっ、お昼から雨なの！？」
今日はあまり気温の上昇を気にせず昼まで耐えていれば・・・・・・
「あ、でも傘持ってきてないや。今日に限って折り畳み傘机の上に置いてきちゃった・・・・・・」
篠の心情としては、天気予報はずれないかな。と何とも優柔不断というか、気持ちが揺らぎやすい。せっかく整えた髪が湿気でぐしゃぐしゃになるかもしれない。気温は思ったより下がらないかもしれない、蒸し風呂状態になるかもしれない。と、先のこと先のことを考えてブルーな日常を想像して鬱になっていく。朝から上げ下げが激しい。
「でも、人間って不思議と実際そうなった時、今考えてることをうっすらとしか気にならないよね、ホントに雨降ってきたなぁ、とかそんなものだよねー」
携帯の画面を眺めて鬱々真っ盛りに突入していた篠のブルーハート。それが前向きな考えになったのかと思いきや、
「・・・ちょっと、愛海（アイミ）。人の心をのぞかないでくれないかなぁ」
それはいつの間にか隣を歩いていた少女がつぶやいた言葉だった。
「あはは、ごめんごめん。だって、しーちゃんって考えてること

がしゃべってる時でも言いそうな、どぉーーーーでもいいことばっかりだから、一日一回の私の”能力”使っても罪悪感ないんだもん」
と、自分勝手な言い分で人の心を覗き見た同じ制服の少女、綾乃（アヤノ）愛海（アイミ）。
彼女はあたしの同級生で、クラスも同じで一番仲がいい友達。あたしが大好きな友達だ。ついでに理事長のお孫さんと鼻の高いことあったりなかったり。彼女の能力というのは、稀に能力を持って生まれるという”天使（エンジェル）”。複数形で”天使（エンジェルス）”だ。
「ホントに大変な”能力”だよね。プライバシーの侵害だもんそれー」
「そだねー、いつもしーちゃんのおかげで能力回数０にできるから嫌な気分にならなくて助かるよー」
あはは、と笑う愛海。
能力回数を０にする理由は、魔力が体内で暴走し、”魔方疾患（マホウシッカン）”と呼ばれる激痛を常時引き起こし、魔力を帯電し続けて死に至らしめる病気を引き起こすからだ。実際、特殊な訓練を受ければ稀にしか起こらない病気になり、多少安心できるのだが、愛海自身が”世界の大樹（セフィロト）”の誘いを断ったらしい。理由は魔法に関わりたくないからだったそうだ。深刻な表情で告げられたから、あたしも深くは聞かなかった。
「・・・・・・もー笑いごとじゃないよ。あたしだって嫌なんだぞー、愛海だから許してるけどさー、不意打ちとかやめてよねー」
篠が隣を見てため息を漏らす。
「あはは、ごめんってば。改まって覗くぜ、って言ってからやるとさー、ヤダなぁ、人に見られるのって緊張するー、愛海にこれも読まれるー、って奇声上げるから見てると頭が割れそうなくらいうるさいんだもん」
「あはは・・・・・・」
と篠が苦笑いして目を背けた。
「そんなしーちゃんが大好きだよ私ー」

「あー、そう。あたしもそんな小悪魔な愛海が大好きよー」
ニシシと笑う愛海。篠には心なしか悪魔の小さな羽と尻尾、触覚が見えたようで、棒読みで返事をした。
「うあ、なにそれ。気持ち全然こもってないから嬉しくないんだけど。照れてんの？」
「能力使用時間１０秒を過ぎたあんたには、照れてるように見えてるんだ。眼科に行った方がいいかもね」
「わー、しーちゃん毒舌ー。この魔性の女めっ！」
篠の頬を指で押しながらグリグリとひねりを加える。
「暑いからやめてよ――――ふゃっ・・・とっ」
立ち止まっていた篠に、後ろから通行人がぶつかり、愛海に寄り掛かった。
「いたー・・・・・・」
「だいじょぶっ！？ちょっとあんた！！」
その通行人は、立ち止まり、首だけ振り返った。
「・・・・・・んだよ？」
前髪に隠れたその鋭い目が篠と愛海を捕らえた。その声はまさに男。・・・・・・なのだが、サラサラの黒髪が長く、腰まで伸びている女性のような見た目。しかし、男。
「あんた今ぶつかったでしょ。あやまんなさいよ」
「ちょっと、愛海、あたしは大丈夫だってば」
男の目つき、声に圧倒されたのか、食い下がる愛海にどぎまぎした様子で止める。
「・・・・・・痛かったか？」
「いえ！全然大丈夫です！！」
声に背筋をピンと直立した姿勢で、即答した。
「そうか、ならいい」
そう言って、スタスタと男は歩きだした。
篠は安堵のため息をついた。
「しーちゃんさー、今のはあいつが絶対悪いって」

「それはそーかもだけど、突っ立ってたのあたし達だし、仕方ないよ」
むすっとむくれ面の愛海の顔をしおらしい顔で見下ろしては、疲れた声色で返す。
「てか・・・・・そうか、ならいい・・・・・ってウチらのセリフじゃん。なんであっちが言うわけ」
あはは、と篠。
「でもさ、あの制服ウチの学校の制服だよね？」
篠の疑問に愛海が顎に手を当てた。
「そーなんだよねー」
「そーなんだよねって、愛海でも知らないの？」
愛海は考えながら遅れて小さく頷いた。
「それがさー、私でも見た覚えがない生徒なんだよね」
「へえ」と篠が声を漏らす。
「愛海でも知らない生徒がいるんだねー」
「名前は知らなくても、顔はほとんど覚えてるつもりだったんだけどねー」
「もしかしたら転校生ってこともあり得るんじゃない？」
「どーだろ。そんな話おばあちゃんには聞いてないなぁ」
愛海にの言うおばあちゃん、というのは我らが学校の責任者、理事長のことである。
「単に聞いてないだけってこともあり得るって」
あまりにも深く考え込んでいる愛海に微笑みかけて話を流そうとする。
「そーかもねっ。あー、内心透視（マインドアンサー）さっきの男子に使えばよかったー」
きぃー、と頭をわしゃわしゃと悔しそうにかき乱した。
いいなぁ、あたしもくせっ毛じゃなければできるのに・・・・・・
小さな夢かも。
「でも、しーちゃんの髪もパーマかけたみたいで可愛いと思うよ？」
篠は目を丸くして、驚きをあらわにして仰け反った。

「ちょっ、能力使ったんじゃないの！？」
えへへ、と愛海は笑い、
「可愛いなぁ、しーちゃんは。能力なんて使わなくてもわかるよーだ」
にへにへと楽しげに篠の肩をポンポンと叩き、歩き始めた。
「あたしってそんなわかりやすいのかな・・・・・・」
がくっ、と肩を落として猫背でため息をついた。
「しーちゃーん、早くいこー、遅刻しちゃうぜー？」
数メートル先で手を振り、呼びかける愛海に視線をやると、鞄の脇のポケットから携帯を取り出し、サイドキーでサブディスプレイの時間を確認した。
「あ、ホントだ。待ってー、あーいーみー」
うぇー、と先を歩く愛海の背中を追って少しじめっとした陽気の大通りを駆けだした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5003z/

CURUSADERS

2011年12月17日00時46分発行